

まだまだあぶない刑事

2005(平成17)年9月14日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督＝鳥井邦男／出演＝館ひろし／柴田恭兵／浅野温子／仲村トオル／佐藤隆太／窪塚俊介
／水川あさみ／原沙知絵／木の実ナナ／小林稔侍（東映配給／2005年日本映画／108分）

……タカ（館ひろし）もユージ（柴田恭兵）も私より1、2歳若いだけのほ
ぼ同世代なのに、なぜ今でもこんなにカッコいいの……？ 7年ぶりの「シ
リーズ」には、パソコンマニアとガンマニアのイキのいい若手コンビが登場
するが、さて彼らへの世代交代は……？ その他のキャラは昔のままだが、
7年も経てばそれぞれに変化も。そして犯罪の質も変化し、韓国釜山での小
型核爆弾の紛失あり、米中接近あり（？）のインターナショナル版……。も
ちろんハマのまちも大変化。そのメインの舞台は、『シュリ』（99年）をパク
った（？）横浜のサッカースタジアムだが……？

団塊世代刑事もなお第一線で……？

7年ぶりにスクリーンに戻ってきたタカ（館ひろし）とユージ（柴田恭兵）の
2人だが、今回新登場のイキのいい若手コンビ水嶋修一（佐藤隆太）と鹿沼涉
（窪塚俊介）を従え（？）、脱獄犯の尾藤を追って、なお第一線で大活躍。五十肩
になったり、走力がちょっと弱ったりしているものの、減らず口とカッコ良さは
今なお健在だ。

それを指揮する（？）のは、今や捜査課課長に出世した町田透（仲村トオル）
だが、頼りないのは昔と同じ……？ 少年課課長となったカオル（浅野温子）を
含めた横浜港警察署全体としてのチームワークはいいものの、これでは先が思い
やられるというものだが……？

■ 新人は優秀なパソコンマニアとガンマニアだが……？

優秀でイキのいい2人の新人刑事は港署のヒーローで、パソコンマニアである水嶋のデータ分析によって港署の犯人検挙率は大幅にアップ。また相棒の鹿沼はガンマニアで、今回の尾藤をめぐる捜査でも、その知識をフル活用。タカとユージをメインとし、水嶋と鹿沼をサブとした初動期における町田課長の人事配置は、さすがと感心したが……？

■ なぜ内閣情報調査室が……？

本来終結したはずのシリーズ(?)を復活させるには、それなりの事件性がないとムリ……。そこで今回考えた「事件」は、7年前にタカとユージが逮捕して服役していたはずの尾藤の脱獄。彼の脱獄は単なるタカとユージへの復讐のため、それとも……？

今回大きな役割を果たすのは尾藤の秘書だった美咲涼子(原沙知絵)。この美人秘書は今回どんな役割を……？ そんな興味が深まる中、突然拉致されたタカとユージの前に登場したのは、今は神奈川県警本部長となっている深町(小林稔侍)。そして、その深町に命令を下しているのは何と内閣情報調査室。こりゃ一体ナニ……？ 横浜のまちで一体ナニが起ころうとしているのだろうか……？

■ ハイライトの舞台は『シュリ』と同じく横浜の……？

読売巨人軍を盟主としたプロ野球が大きな曲がり角に立っていることは、今年の巨人軍のふがいない成績の中で一層明らかとなっている。今年の阪神タイガースの優勝はもはや疑うべくもない(?)が、野球人気とサッカー人気は今後どのような展開に……？

現在の韓流純愛ドラマブームを生んだのはヨン様とチェ・ジウ姫の『冬ソナ』だが、「韓国映画ここにあり」とその骨太で壮大なストーリー性で観客を魅了したのが『シュリ』(99年)。そしてこの『シュリ』のハイライトの舞台は、2002年のサッカーW杯に向けて南北交流試合が行われるサッカースタジアム。移送中に奪われた液体爆弾CTXがここで爆発すれば、一体どんな惨劇が……？

今や日本で1番人気のまち横浜の名物の1つは、あのサッカースタジアム……？ そしてそこでくり広げられる今夜の試合を多くの熱狂的ファンとともに極秘で観戦しているのはなぜか米中のVIPたち……？ ゲームオーバーと同時にここで小型核爆弾が爆発すれば一体どんな事態に……？ さあ、『シュリ』のパクリ(?)ともいえるラストに向けて、2人のあぶない刑事はどんな活躍を見せてくれるのだろうか……？

ラストで明かされるさまざまな真相とは……？

この『あぶない刑事』シリーズは半分喜劇だが、半分は真剣な刑事ドラマ……？ ましてや7年ぶりの「復活」とあっては、タカとユージの絡む犯罪は国際的……？ 韓国釜山での小型核爆弾の争奪戦にはじまり、メインの闘いにおいてはちょっと怪しげな米中接近(?)も……。万一、アメリカの武器が武器商人を通じて中国に渡るようなことになれば、そりゃー大事……？ こんな事件に涼子が一体どのように絡んでいるのか？ そしてそれらを仕掛けたホントの黒幕は……？ さあ、ラストで明らかになる真相に要注目だ……。

2005(平成17)年9月15日記

ミニコラム

もう少し頑張れ！ 団塊世代の同窓生たち

60歳を間近に控える中、盛んなのが同窓会。肉体的・経済的な衰えを自覚し、思い出話に花を咲かせるのはサラリーマンで、弁護士の私や大学教授・自営業者たちは、今なお意気盛ん。昨年1年間、愛媛新聞の第1面大型コラム「道標」の執筆者の1人となった私の後を継いだのは、愛光学園1年後輩の白石隆氏。ある事件の相談を受けた

時は、彼が京大でアジア政治・国際関係を研究している大先生とは知らなかったが、日中・日韓を含む東南アジア外交が注目を集める今、彼は大車輪の活躍で、彼の解説記事が再三新聞紙上に。団塊世代の同窓生たち、こんな彼の姿を見て、もう少し頑張れ！

2006(平成18)年4月19日記